小説 空蝉
挿絵 けいじえい

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

第一章　追う者、追われる者　006
第二章　堕ちゆく肉体、肛虐の魔蛇　052
第三章　刻まれる縛め、溶けゆく誇り　104
第四章　望まぬ破瓜血に聖鎧は濡れる　136
第五章　堕落、蒼き鎧は牡汁にまみれ　189
エピローグ　245

# 登場人物紹介

Characters

## リデア

ラルス王子を守りながら旅を続ける忠義の女騎士。

## ラルス

ラトゥール王国の王子だが、王妃イライザに命を狙われる。

## エルドゥ

リデアらを狙う調教師。

## イライザ

死去したラトゥール国王に代わり、国を治める王妃。

## モロコフ

ラトゥール王国の大臣。

## 『第一章　追う者、追われる者』より

「はひッ、い、いやぁっ、腰が落ちるぅ……こ、こんなスライムなんかにぃ……ッ！」
もじもじと擦れあう腿の間から、ぽたりぽたりとスライムが吸いきれなかった愛液が地面へと零れては黒い染みを作った。染みはあっという間に広がり、一分ほどで小さな水溜まりほどにまで膨張する。
腰は砕けガクガクと膝が笑う。けれども縫いつけられた足のせいで倒れることは許されず、後ろのめりに尻餅をつく格好となった。
「坊やにもしっかりと見えるように、邪魔なコレを外してやろうなぁ」
早速男の手が、全くの役立たずに成り下がった腰当てに伸ばされる。ガチャガチャという金属音と共に勢いよく下半身を覆う鎧が取り外された。
「ひやぁっ……み、るなぁッ！　王子も……お願い、見ないでぇ……ッ！」
剥き出しとなった純白のビキニ。淫水を吸い上げて肌に食い込むその表面には、びっちりと蒼く透き通る魔物が張りついていた。ウネウネと蠢く半透明の粘液体の向こう側、よじれた下着の脇から顔を覗かせる濡れそぼった秘肉に、調教師と少年の二つの視線が交錯している。
「あぁ……あれが、リデアのっ……」
「そう。アレが女の生殖器。オマ〇コだ。よぉく目に焼きつけておけよ、王子殿」
ごくり、と王子の喉が鳴るのを、悲嘆に沈んだ面持ちでリデアは聞いた。大きく見開かれた少年の眸がじっと熱視線を送り込んでくるのを、股間で感じる。さらなる凝視を促す

男の言葉に、絶望が心を覆った。
（見られてしまった……ラルスに。私の恥ずかしい穴に、スライムが吸いついているところぉ……見られてしまったぁ……！）
「さぁココからが見物だ。あの綺麗に閉じた襞を掻き分けて、スライムどもがマ〇コの中に潜り込む」
「……ッッ⁉　リ、リデアの中にあんなにいっぱいのスライムが……？」
「い、イヤよぉ……ッ！」
驚愕の表情を浮かべる標的の男女を交互に見渡し、調教師は口端を嫌味に歪めて自信たっぷりに告げた。
「入るさ。女の膣孔ってのは存外に深く造られていてな。詰め込まれれば何でも受け入れることができる蜜壺、浅ましい淫穴なのさ」
「くふぅぅぅ……お腹、もう……持たないィィッ！」
懸命に脱力する下半身に活を入れていたのも、とうとう限界が訪れる。自らが吐き零した淫水の水溜まりに尻を浸し、ガクガクと情けなく小刻みに震える脚を見つめる。どうにもならぬ肉体の変化に焦燥感ばかりが募る中、力の抜けた膣の入り口が、徐々にぱっくりと蜜を零しながら開け放たれていく。
「そぅら、入るぞ……行け、可愛いスライムどもよ」
――ずちゅ……ぢゅるるんっ！

「ひぎッ……！　ぎうぅぅぅ〜〜〜ッッ!!」

つるり、と何か、柔らかいようで芯のある不思議な感触が押し入った。当の女騎士にはそのように感じられた。窮屈できつい狭門をこじ開け、変幻自在の蒼い粘液塊が未開発の膣内へと侵攻する。こぞって突き入ってくる粘着質の異物に、女としての本能からか、それとも生理的嫌悪感からか、背筋をゾクゾクと痺れが伝う。

（気味の悪い粘液の塊が、私の……私のお腹の中に潜り込んできてるうぅぅっ！）

敵はヌルヌルの体液を吐き出して潤滑油代わりとすると、ブニョブニョの身体を弾ませて膣内粘膜へと張りついてくる。催淫液を敏感な粘膜に直接にしこたま塗布されて、たちまちのうちに腰から下がじゅくじゅくと疼き始める。その甘美な刺激に、処女戦士は外聞もなく腰をよじり身悶えてしまう。

「はきィッ……こ、こんなの強すぎるぅ！　腰の奥が疼いて……だっ、だめなのぉッ！」

自由になる首をイヤイヤをするように振りたくり、冷めてひんやりとした感覚の愛液溜まりの上でビチャビチャと音を立てながら尻をよじらせる。耳から聞こえるそのイヤらしい響きに、情けなくも胎の奥がキュンと反応を示してしまう。性に疎い女騎士の肉体は急激な性感開発に戸惑い、一気に綻び始めていた。

傍目から見れば相当惨めで、かつはしたなくイヤらしい姿に映るであろう、女の媚態。

「見えるか。実に煽情的だろう？　あれが女という生き物の本来の姿、牝としての貌だ」

やはり粘液の責めに身悶える少年の傍へ近寄って、調教師がぞんざいな口ぶりで自説を

述べる。ラルスは自身を襲う責めに荒い息を吐きながら、とうとうと語られる淫蕩の文言を、まるで高説の如く聞き入っていた。

（やめて……ラルス様を、穢れなくて無邪気な、あの子を汚さないでぇ……！）

無垢な子供が、淫欲に満ちた大人に変えられてしまう。その恐怖に愚直なまでに怯え、去来する想いを押し隠して陵辱の主導者を睨みつける。気を確かに持って快楽に溺れさえしなければ、必ず勝機は訪れる。この窮状にあってなお、彼女は頑なにそう信じていた。

時折肉襞の隙間へと体液を吹きつけ、ざらざらの膣壁を食むように絡みつきながら、もどかしいほどの緩やかな速度で、熱くぬめる膣道に入り込んだスライムの群れは、一途に目的地へとのそりと這い進んでくる。

「そろそろか……」

「な、に……？　はぅッ……！」

胎の中心がブヨン、と何か柔らかな物に弾かれる感覚。次の瞬間軽い痛みと共に強烈な快感が腰骨から染み出して全身を瞬く間に侵食していった。

「どうやら膜は無事に在るようだな。激しい運動で破けていはしないかと心配したが」

再び近寄ってきた男の言葉に、ようやく気づく。子を宿し育てる子宮へと続く路を塞ぐ、未開の地への扉。処女膜へとついに魔物の侵入を許してしまったのだ。脆弱な皮膜を獰猛な魔生物に無防備に晒し、それを防ぐ手立てすらありはしない。先ほどとは違う恐怖で視線は移ろい、大きく張った腰が惨めにガクガクと震えた。

「この程度で腰砕けになってもらっては困る。……ついでに、感度の検査をもっと念入りにしてやろう」

また、パチンッと勢いよく弾かれた男の指が鳴る。それは陵辱の合図。拠り所であり未だスライムで覆われた右手に握った剣では守ることのできない、女として最も大事な器官への、淫蕩なる責め苦の開始の合図だった。

――ずぢゅりゅりゅりゅっ……！

「ひぐふぅっ！　はぐ……お、お腹がっ、いひゃあああぁぁッ！　あくぅぅぅ……ッ！」

「ショウの始まりだ。たっぷりと塗りつけてもらえ」

大きく左右に開かされたままの脚の付け根、胎の中で獣の群れが暴れ始める。処女膜を前にグイグイと微妙な感覚で粘着ボディを未開の肉襞に押しつけ、またあの催淫体液を大量に塗りつけて喜悦に震えている。

男の言葉をぼんやりと耳に留めながら、汚濁汁を薄い皮膜にまでベッタリ塗り込められているのをはっきりと感じた。

充血した乳首が胸当ての奥で膨張し、防具と擦れてジクジクと痺れる。堪らず身体を震わせれば、汗と汚濁でぬかるむ胸当てから右胸がぽろりと零れた。

羞恥に恥じ入る間もなく、全身が性感帯になったかのような突き刺さる刺激に、女騎士の清廉な精神は侵されていく。

「はぐぅ……負けるもの、かっ。こんな辱めなどで屈したり……あひいいィィィッ！」

言葉なき陵辱者の出鱈目な抽送にさえ、媚薬漬けとなった彼女の身体は過敏に反応を示し淫態を晒してしまう。どんなに唇を噛み締めようとしても、その隙間からは堪えきれない嬌声が絶えず漏れ出ていく。

「堪らんだろう、剥き出しの粘膜に汁を浴びるのは」

無精髭を撫でつけながら男が唇を歪める。その向こうには涙目ですがるように騎士を見つめる、幼い少年の姿。腰を引き、もじもじと揺らしているのは彼が性的興奮を姉と慕う騎士に覚えている証拠でもある。

（いやぁっ、王子、そんな目で見ちゃ駄目……ダメなのォォ！）

心中の想いと裏腹に、王子の淫欲の視線に、彼女自身倒錯した快感を覚えてしまっている。胎内を襲う微動刺激と相まって、急激に牝として開花し始める熟れた蕾。すっかり綻んだ陰唇はぱっくりと唇を開き、その桃色の粘膜までをさらけ出してしまっていた。

「綺麗な粘膜だ。これから、じっくりと好色な中年親父好みのビラビラに変えてやる。完成された作品、立派な牝奴隷として、大臣に献上してやるぞ」

大股開きの間にしゃがみ覗き込む男の眸に、もぞもぞと震える蒼い粘液の一部が映る。男の肉太の指が、ずぶりとその尻尾を押し込むように、桃色の粘膜へと突き立てられた。

「ひゃぐぅぅぅッ！　あっあぁ〜〜〜ッッ！　ひゃあはぅぅッ、うぐうぅぅぅンッ！」

潰されそうなほど窮屈に押し込められたスライムたちが、一斉に狭小な蜜穴の中で暴れ狂う。無防備な処女粘膜にブチュブチュと粘液を吐きつけ、薄皮一枚隔てた先の子宮口へ

逃れようともがきのたうち回る。
（破けてしまう……下等生物に、私のバージンが奪われてしまうぅぅッ!!）
騎士としての誇りを刻んだ鎧を剥がされ、今まさに女としての大切な器官を穢されようとしている。自由にならぬ腕と脚を懸命にもがかせながら、その時が訪れるのを覚悟し煩悶に歪む瞼をきつく閉じた。
「ソコは高く売れる商品だ。心配せずとも、破かないようにコイツらは躾けてある。安心して乱れ狂うといいぜ」
女騎士の覚悟を読み取り、男は漫然とそう告げた。
自身の初めての性交が、すでに売約済みであるという事実。追い討ちをかけるかのように、魔生物が一斉に黄みがかった体液を処女膜目掛けて吐き散らかす。その上でチューチューとヌルつく皮膜に強く吸いつかれた。強力な吸引に、薄い皮膜がビリビリと揺れる。次いで、全身に汚濁が降り注いだ。
――びしゃっ、びちゃびちゃびちゃァァッ！
「ひッ、ひぐぅぅぅ！　何か、くるぅぅ……ッッ！」
神聖なる処女の証と愛用の鎧を一斉に汚濁まみれに穢されて、尻餅をついた腰がガクガクと揺れながら持ち上がる。身に纏ったわずかな防具は汚濁を垂らしながらカチャカチャと金属音を響かせ、膨大な催淫液に侵されて感極まった容貌ははしたなく舌を突き出し、ひっきりなしに喘ぎ声を奏でた。

「イケ。牝の本性を剥き出して、はしたなく果ててみせろ……！」
男の声が最後の後押しをする。掻き回され続ける生殖器の内部を覗き込むように傾げた貌の、凍てつくような視線が、決壊の引き金となった。
「ひゃぐッ、ひくぅぅンン！　ンひィィッ、舐め回されてッ、イックうううぅぅッッ!!」
――ぷっしゃあぁぁぁッ！　ぴゅるっ、びゅぴゅびぷぷぷッ！　ぴゅるるぅ！
弾けるように噴き出た潮と共に、蒼いスライムどもを膣内から吐き出し、処女の女騎士が初めての絶頂を覚える。陸に打ち揚げられた魚の如くビクンビクンと跳ねる腰は高く突き出され、その中心で淫らに口を開いた花芯の中央から、ビュルビュルと透明の噴水が激しく上がる。魔物の体液と入り混じり、より粘性を高めた液体に押されて、次々とスライムたちが桃色粘膜の内から吐き出されてきた。
まるで自分が魔物を産んでいるようだ。そんなとてつもなく不吉な考えが、一瞬リデアの頭をよぎる。
「ひはっ……はっ、あぁぁ……」
「まだまだだぞ、そら！」
パチン！　男の指が鳴ると同時に、手足を拘束していた残りのスライムまでもが、待ちかねた馳走を求めて潤んだ蜜壺へと潜り込んだ。
「おぐぅぅぅッ！　だめ、もうダメなのぉぉッ！」
――ぢゅぷぷぷっ、どくどくどくぅっ！

**『第三章　刻まれる縛め、溶けゆく誇り』より**

真っ先に蛸汁の溜まっていたへそ周辺の網目がほつれて溶け、開いた裂け目から緩やかなカーブを描く下腹部が露わとなる。次いで、じわじわと煙を上げているのはうっすら透ける桃色乳首の周辺。ギリギリ乳首を隠してくれていたレース部分が蝕まれるように溶け、赤い生地も徐々に剥げ落ちる。蛸への嫌悪で薄らいでいた羞恥心が、たちまち再び渦を巻いて零れかけの胸を苛んだ。

「これが混合液の効果だ」

「い、イヤっ……。っくぅ、卑怯者め！　このような行い……恥ずかしくないのかッ！」

慌てて胸元と腹を隠そうとした両腕は無数の吸盤に吸いつかれ、拘束されたままで、ただヌルヌルと素肌に感じる触手のぬめりに、焦りばかりが募る。どうにもならぬ忌々しさをたっぷりと込め、半ば当たり散らすように調教師に放った。

「何を今さら。俺の仕事はお前を立派な娼婦に造り変えること。ちゃちな騎士道精神とやらに用はない。……じきにお前の中からも、そんなものは消え失せてしまうさ」

――じゅッ！　じゅぅぅ……。

また。薄い生地が数ミリ、溶けて消えた。減っていく衣装から覗く、羞恥と興奮でうっすらと赤らんだ肌。汚濁まみれの下腹はテカテカ濡れ光り、半分以上零れ出てきた乳肉は汗ばむ煌（きらめ）きもそのままに美味そうに男の目を愉しませる。

（あぁ、そん……な……。これ以上溶かされると、全部見られてしまうぅ……！）

すでに一度全裸を見られていると知ってはいても、女を捨てた騎士にとってそれが死よ

りも恥ずべき屈辱である事実に変わりはない。抵抗すらできぬ中、ドロドロの汚液で全身を隈なく染められて衣服を剥ぎ取られる恥辱に、甘んじるしかない身が情けなかった。

「はぅ……やめろ。もうこれ以上汚い汁を吐きかけるなァ……！」

ビスチェはすっかり濡れそぼり、大小の穴を開けられて、もはや辛うじて果たしていた肌着としての役目さえ失っていく。穴から覗く肌に直接蛸汁がぶちまけられ、無数に群がる赤黒い触手で埋め尽くされる。さらに垂れ落ちた混合液は黒タイツをも侵食し、開いた多くの穴から肉付きのよい柔らかな腿肉がぷくぷくと浮き上がった。

大量の触手群が張りつく吸盤の感触に、過敏な肌は小刻みに痙攣を繰り返し、伝導する股座ではぬちゅりと魔蛸のものではない蜜が湿り出すのを自覚する。とうに冷静な判断力を奪われ、愛欲の波に押し流されかかっていた精神は騎士としてあるまじき醜態を晒す自身を叱咤することもできなくなっていた。

「さぁ。新たな淫欲への楔（くさび）を胎の中に受け入れるがいい――！」

ぐねぐねと素肌を蠢き、生臭い汁を擦りつけていた吸盤触手の内の一本が、ゆらりと持ち上がり鎌首をもたげる。胎奥を犯される――貞操の危機に、とっさに股下で脚をばたつかせようと、無駄な、ごくごく小さな抵抗を試みる。だが、宙を漂う先細りの赤黒い異物が指差したのは、荒く息を吐く生娘の口腔だった。

「安心しろ。愉しみは今しばらく取っておくさ。まずはお転婆が過ぎる唇を躾けてやろう」

「なっ……イヤぁ！　いひゃっ……がぽぉッ!?」

――ぬぽぶぶぶぶぅぅッ！

反論を試みようと半開きになったところを狙われた。唾液で湿った唇をめくり、狭く熱くぬめった口腔内へと、よりぬめった触手が潜り込んでくる。無理矢理押し込められるブニブニと柔軟な吸盤と肉幹、けれどしっかりと芯のある感触が舌先を滑る。全く心の準備のないままに侵入される顎関節が引き攣り、慄く心情のままガクガクと痙攣を始めた。

（く、臭いィィッ！　生臭さが口一杯に、広がってぇ……うぇぇぇ）

「味わえ。初めて唇で咥え込んだ牡の汁と熱。感覚を舌先と心に刻め……！」

調教師の重低音が驚愕で打ち震える心に否応なく染み入ってくる。男の主張に耳を傾けるべきではない。そう思ってはいても、ついにほつれたビスチェから零れた勃起乳首は硬くせり出し、高鳴る鼓動のままに衣装とのすれすれのラインでツンと突起を膨らませた。

スライム、魔蛇、魔蛸――種々様々な異形の手で強引に開花させられた淫肢体が、屈辱に沈む心の動きとは逆に昂ぶり、痴態を見せつけようともがいている。

――ぢゅづるぅぅンッ……。

「んもっ、ごぷぶッ！　んぐ、んごふぁぁぁぁ……！」

繊細な触手の先端に縮こまる舌を巻き取られ、チューチューと吸いつかれた。舌先のみならず、唇の裏、喉穴の上肉、歯茎と歯の境目に至るまで。吸盤が口内粘膜のあらゆる場所に張りつき、粘着質で生臭い体液を擦り込んでいく。乳肉を幾重にも巻き上げ搾り上げる厳しい締めつけも、早まる動悸に乗せて痛痒い快楽を絶えることなく供給し続けた。

「んんふッ！　ごぷっ……うぐぇぇぇっ、かは、いっやァ……！」
舌根に溜まる異物の体液に、拒絶反応を起こした喉下でえずきが込み上げる。舌にべっとり吸いついた吸盤に唾液を啜られる感覚に、舌が震え、全身を悪寒が奔った。肌に張りついた深紅のビスチェに胸元から噴き出た脂汗が滲む。汗はわずかに残る衣装の紅と魔生物の赤黒とで彩られた乳谷を滑り落ち、剥き出しの腹へ、そして股座で色づく栗毛の茂みへと零れていった。
「げほっ、おぐ……ひゃう、まらがひめるぅ……」
股間で受け止めた己の汗に、思わず太腿が痙攣を返す。いかに小さな刺激でさえ、スライム粘液に侵された肉体は過剰な快楽反応を示してしまう。口中の蛸足の吐きたくなるような生臭さに耐えようと、下腹に力を込めようと踏ん張る。そうすればするほど、滴る汗が肌を滑る感覚がより如実に、直接腰骨に響いてきた。
「噛もうなどと思わぬことだ。そいつの足は幾らでも生え変わる。単に口の中で蛸汁をぶちまけるだけだぞ。クッ……クク」
（うぅ、それでは、あぅ、喉が、口の中が犯されていくぅ……）
このまま触手の無体を許すほかに手立てはないというのか。よぎりかけた諦念を振り払い、女騎士は剥き出しの肩と腹を震わせてなお、憎き調教師を睨む。まだ、屈してしまわけにはいかない。主を助けるまでは――。強固な一念だけが、肉体的には完全に屈服寸前の娘を支えている。

「……まぁ、どこまで耐え抜けるか。見ものではあるな」
主の言葉に応えるように、蛸が無言で唇を突き出す。射程を定めたおちょぼ口が、すでにたっぷりと汚濁を浴びた二つの乳山を見据えた。
「い、いひゃっ、もう蛸汁は……！」
回避する術は、何一つない。身を縮こまらせることさえできず、リデアは弧を描いて飛ぶ汚濁汁の軌跡を、嫌悪で歪んだ視界で見届けることを強制される。
――びゅぐ！　びゅびゅびゅ――――！
「んぁひッ！　あっ、くぅぅぅ……！」
再度蛸の口から発射された粘液の塊は、べっとりとリデアの胸元へ飛び散った。球状の乳丘の中心でサクランボのように色づく突起がぽっちりと浮き出て、ピク、ピクと小刻みに蠢くたびに纏わりつく汚濁を飛び散らかす。淫靡に造り変えられた全身を、背筋から爪先まで覆うのは完全なる快楽。切なく疼く、痺れるようなもどかしい渇望だった。
「……んんんぷっ……！　っはぁ、はっ……嘘、だ。私の身体がこんな……こと。あるはずがないィィっ……くひゃァァおぉン！」
ようやく追い出した異物の先端と、唇の端とで半透明の糸が引く。視界の端でキラキラと煌くソレは卑猥なくせに美しくもあり、まるでリデア自身が淫欲に堕ちた徴であるかのように思えてくる。今しがた己が吐いた言葉が、酷く嘘臭い響きを帯びてしまう。
そして。ついに、震えつつも後ろ手に踏ん張っていた二本の腕が、肘の部分から脱力し

てがくりと折れた。
「あっ……⁉　い、いやぁ……立って、お願いだからぁッ！」
一度抜けた緊張は、完全に感覚を喪失した腕には二度と宿らなかった。微かな希望をひそめて突っぱり続けた腕の支えを失い、上半身が倒れ込む。落胆で凝り固まる心を反映してか、揺らぐ視界がやけにスローモーに思えた。
呆然と虚無感に襲われる中、ポニーテールが石床を掃き、頭部に冷たい感覚を覚えるまでに実際はどのくらいの時間が経過したのか。閉じかけの瞳に暗い天井が映し出される。
――ぬりゅ、ぐぢゅぷぶりゅりゅりゅ！
「はぐ、あひィィィィ！　登ってくる、ヌルヌルがお腹に張りついてぇぇッ！」
蛸汁を追跡するように、こぞって吸盤触手が穴開きの薄布上を這いずり登る。薄い生地一枚隔てて感じるぬめりと、吸盤に張りつかれ、皮膚が引っ張られる感覚に背筋がしなる。仰向けに倒れた胴体の下で、折り曲げた膝がカタカタと笑い、だらしなく開いた股座でぴゅるぴゅると蜜がしぶく。
過敏な肌がぬかるみで浸されることに、屈折した快感を肉体は確実に感じていた。
――じゅ！　じゅじゅぅ……。
（はひ、出ちゃう……胸が、全部エッチな服から零れてしまぅ……！）
蛸汁と触手の体液とが混ざり、また薄い下着が溶けていく。紅いビスチェが少しずつ消失するのに合わせ、半ばはみ出た乳肌が徐々に面積を増していった。先に零れ出ていた乳

首は解放感に震え、小指大にまで肥大した先端をピンと張り詰めさせる。
動悸が収まらない。調教師の経過を見守る冷淡な目と、物言わぬ蛸の貪欲に獲物を狙う双眸。肌を這う触手らにさえ、それぞれ目がついていて無数に視姦されているような錯覚を覚えてしまう。
（見ないで。もうそれ以上見ないでよォッ……）
見て欲しい。本当は、騎士としての殻を剥かれた自身の肌を見つめられ、被虐悦楽に沈みたい。相反する願いが、粘液で濡れ輝く乳の奥で交互にせめぎあう。仰向けとなったせいで腹から胸元へと、左右に寸断されたビスチェから覗くなだらかな丘陵をドロリと垂れ下る汚濁が、揺れる騎士の心を堕落の方向へと引きずり込もうとしていた。
「さぁ咥え直すがいい。もうじき、淫熱の濁汁を直接注ぎ込んでもらえるぞ！」
――ぐぽぢゅるるッ！　ごづッ、ごづんッ……！
「んんぐぅぅぅ――――――⁉　んぶ、うぇ、やはぁ！　ぶぷふぅっ……！」
再度。生臭い汚液と、掻き回され泡状の唾液、それらの混合液で満たされた生温かな口内へと赤黒い異物が潜り込んできた。ぬるりとした感触の侵攻と同時に、まるで心を染め抜かれていくかのような危機感に襲われる。侵攻を防ごうと慌てて窄めた唇は、丁度異物の幹を絞る格好となってしまう。
何をしても裏目に出る現況に、淫熱で焼け焦がれる胸の内が憔悴で満たされていく。
（いあぁぁぁ……おう、じ、許して……！）

**『第四章　望まぬ破瓜血に聖鎧は濡れる』より**

陵辱の痕跡の残る肉棒を露出させたまま震える蒼い鎧と壁際の幼い虜囚を見比べ、これ見よがしに男は語りかけた。うな垂れて震える王子の隣では調教師が無言で直立し、事の次第を観察し続けている。

リデアはできるだけ男たちを見ないよう努めながら、感覚のない腰をぶるりと大きく震わせた。ぽっかりと異物の形に開いたままの淫唇が、ダラリと白く濁った汁を吐く。奥深い肉襞の隙間より後から後から零れ出る淫液は、なかなか途切れてはくれなかった。

「あぁ、もったいないだろうが。ふん、牝奴隷風情が兄さんが出した子種を零すなッ！」

――パァンッ！

「ひぅんッ！」

掌で握り締めていた肉棒の主が激昂して、胸当てから零れた乳肉を叩く。突き抜けた痛みにリデアが顔をしかめると、弟騎士は兄そっくりの凶暴な薄笑みを浮かべて見下してきた。この男も同じ穴のムジナ――腐りきった肉欲の虜なのだ。

「僕は女を上に乗せるのが好きでね。……いい尻だ」

「くぁ……ッ、ひっ、いひぃぃン……！」

男は自ら石床に寝そべると、その真上に白濁まみれの尻肉を誘導する。力なく降ろされるリデアの尻を一撫ですると、やおら硬い切っ先を押し当ててきた。トロリと淫穴から垂れる兄騎士の白濁と、その弟のカウパー汁とが淫らに絡まりあう粘着音が娘の心を灼く。

「兄さんの精液でぬかるんでるんだ。そのままぶち込むぞッ。……まぁもとから、肉便器

の薄汚れた穴など、弄ってやるつもりもないけどね……そらぁっ！」
「はぉぁ、あっ……あくぅ、入って、くるぅ……」
真下から男が腰を押し出すと、先ほどまで埋まっていたのとほぼ同サイズの肉凶器が深々と押し入ってくる。ぽっかり開いたままの肉壺は抵抗一つなく異物を迎え入れた。繋がるや否や、男の指先は肉唇の上で色づく桜色の突起へと伸ばされる。
「小便まみれの牝犬か。確かに臭い。身体中、牡牝の香りを漂わせてむせ返りそうだッ」
親指大にまで肥大した肉芽を、摘んだ指先で巧みに捏ねくり回す。引っ張り、指の腹で押し潰し、千切れんばかりに捻る。鋭い快楽刺激に蕩けきった牝肉は痙攣し、小刻みに震える太腿の付け根で、また催してくる液体があるのを女騎士は感じ取っていた。
「ひぁ、や、めてぇ……漏れ、また漏れちゃぅ……」
「犬は犬らしく、好き放題に漏らせばいいだろう？」
背後から尻に圧しかかる男の腕が、リデアには枷でピクリとも動かせぬ片脚を抱え大きく割り開いた。犬の放尿体勢。屈辱的なポーズを取らされてなお潤む淫肉の割れ目に、より深く男の逸物が埋没していた。
「ふん、よっぽど奥で兄さんに出されたんだな。子宮の手前までドロドロだッ！」
穢された女を抱くのは慣れているのか、それとも兄と同じ娼婦を抱くことに興奮しているのか。荒い鼻息が汚濁でカピカピになったポニーテールを揺する。挿入前から昂ぶっていた肉茎は早くも膨張して、射精の前兆を見せ始めていた。

「ククク、そら漏らせよ牝犬！」
――パァンッ、パパァァッ！
「ひっぎぃぃぃッ！　いひゃッ、出るっ、出るぅ！」
――ぷっしゃぁぁぁッ！　じょっ、じょろろッ！　ぶしゃあぁぁぁ――――――！
小さな穴に溜まり過ぎた小便は、我慢した分勢いよく弧を描いて噴出した。家畜のように青痣の浮く尻を打ち抜かれ、敏感に改造された尿道を刺激されて命令通りに放尿させられる。――まるで、本当に牝犬にされてしまったように。犬のポーズで黄色い尿を噴き漏らし、同時に背筋をゾクゾクと淫悦の快感が奔る。
（私、卑しい淫らな肉の塊に、変えられて……はぁ、はぁぁ！　我慢なんて、もうできないぃぃぃッ！）
汗でぬかるむ太腿が、弟騎士の腹の上に乗せた両腕が無力に打ち震える。自分を責めれば責めるほど、逆に被虐の快楽が鎧を零れ出た胸の奥で燻っていく。諦めた瞬間から燻りは切ない疼きへと片っ端から変換された。無意識のうちに、またリデアの尻は男に合わせて前後に動いていた。
「……堪らんな。また勃ってきやがった。おい、俺のも世話してもらうぞッ！」
先刻精を放ったばかりの兄騎士が、再び貪欲に猛り狂った牡の象徴をリデアの手に握り込ませてくる。掌で感じる牡の熱量――強力な欲望で肢体を染められていくかの如き被虐の妄想を掻き立てられて、娘の尻がまたはしたなく痙攣した。

「はくぅ！　うんんぅ！　やっ、奥まで届くぅ！」
垂直に突き立てられた肉棒はより女の奥深い部分まで貫き、未開の肉襞を手懐けていく。すがるように張りついてくる媚粘膜を剥がしながら猛進し、子宮頸部を強かに叩いては蹂躙の悦びに震えるのだ。牡の脈動と同時に、リデアも腰を左右へとくねらせる。
連続で投与され続ける淫悦の渦に、騎士の清純な心は呑み込まれた。恥辱を忘却の彼方へ押しやり、ただ快楽を欲するがために尻肉を男の腹の上で躍らせる。ガチャガチャと鳴り響く鎧の音ももはや誇りを刺激することはなく、今はうるさい音としか認識できない。
「くぉ、なんてスケベな腰使いだっ、やはりお前は天性の娼婦ッ！　牝犬だッ！」
――ぱんッ、ぱぢゅぷ！　ぢゅぽぶぷ、ぐぢゅぷ！
（あぁ、みっともないエッチな音響いて……王子にもきっと、聞こえちゃってるぅ……）
辱められ、屈辱に胸を抉られるそのたびに、逆に媚体を侵食する快楽量は増加していく。蕩けた思考は徐々に抵抗を弱め、与えられる快楽に恭順しようとしていた。愛しい王子の視線さえ、とうとう悦楽の一エッセンスに成り下がってしまっている。
「リデ、アァ……ぐずっ、うぅ。やめて、僕以外の前でっ……そんな貌しないでよぉっ」
（くぅん……見られちゃってるぅ。私のエッチな顔、ラルス様がじぃっと見てくれてるのおおおぉッ！）
王子は鼻水が垂れるのも構わずに顔中ぐしゃぐしゃにして泣き喚いていた。その隣に立つ調教師がニヤリと薄笑みを浮かべ、何かを幼君の耳元で呟く。

「あれが女だ。牝の本性さ。王子殿も遠慮せず、頭の中で存分に犯してやるといい。誰彼構わず尻を振り立てる、淫欲の牝犬をな」
「うくぅ、あぅ……リデア、僕のリデアぁ……！」
少年の撫で肩が小刻みに震える。同調するように小さな包茎ペニスが上下に揺れるのが、半透明の粘液塊の向こうに透けて見えた。健気に勃起した子供サイズの肉茎が、ピクンピクンと可愛らしく覚えたての快感に怯えている。
（あぁ、あんなに硬く……勃起させて……！　私を検査したスライムに、王子のおちんちんがずっぽり包まれて……犯されてるぅ……！）
自身の処女肉を穢した忌まわしい異形生物に、今は主君がなす術なく無力な肉体を弄ばれている。奇妙な繋がりに全身を熱い血が駆け巡ると共に、異形生物への強烈な嫉妬が胸で渦巻いた。
本当であれば、自分が幼い主君の性の扉をこじ開けてやるはずだったのに――。
「チッ、よそ見せずに俺のちんぽをしっかり扱け！　牝犬の分際で！　俺の頬に傷をつけた償いをきっちりせんかッ！」
――むぎゅぎゅぅぅ！
「くぅんん……ッ！　っはぁ！　お乳は、や、やめへぇ！　くひッ、感じすぎィィ……」
兄騎士の指が柔らかな肉に食い込むほど強く、汗ばむ乳房を握り締められた。キュッキュとリズミカルに尖った乳頭ごと桜色の突起を扱かれると、跳ね上がる鼓動に合わせて、

自然と股下からは新鮮な蜜液を吐き零してしまう。
「兄さんに口答えするなッ、牝犬のくせにッ！」
――ぐりゅりゅぶぶ！　ぬぶぅ！　ずぼっ、ぬぢゅぶぼおおぉぉぉッ！
「やはぁ、あぉ！　はひぃいいぃぃ～～～ッッ！」
下から乱雑に突き上げられ、肉ビラが悲鳴を上げる。牡肉に張りついた陰唇が無残にめくれ、また膣粘膜の内側へ押し込まれる。割れ目の上部でぽっちりと膨らんだ肉芽も、押しつけられた肉幹でしつこく擦り立てられ、押し潰された。その都度、腰骨をキュンキュンと切ない痺れが渦巻いて襲うのだ。
「はぁひぃィッ！　ら、めぇぇ！　お腹、キュンキュンってぇ！　きちゃっ、すごいのきちゃうよぉ！」
己の快楽を伝えるために、掌で握る肉棒をきつく締めつける。腰を揺すって、秘裂に沈んだ肉棒を進んで奥へと招き入れ、新鮮な子種の注入をせがんだ。もっとたくさん気持ちよくなりたい。今や女騎士の頭の中はその一念で埋め尽くされようとしている。
陵辱の限りを尽くす陰茎に自ら従順にすがる淫靡な肉の蠢きに、男たちは思わず情けない呻き声を張り上げた。
「くぉぉ、俺が握られただけで出しちまうッ！」
「兄さんのザーメンでぬかるんだマ〇コも、最高です……ッ、ぬくぉ、で、出るッ！」
――びゅるぶぅぅっ！　ぴゅぶぶぶ！　びぢゃびぢゅあああぁぁぁ――――ッ！

腹の下から素早く引き抜かれた牡の勃起が白濁のシャワーをしぶく。掌で爆発した肉勃起はビクンビクン跳ね回り、所構わず汁を吐き散らかしていく。

「ふわぁっ、やぁ、臭いのまたかかってぇ……！　ひくっ、ひっちゃうふぅぅぅぅぅ――――ッッ!!」

臭気に鎧ごと身を焦がされた瞬間、騎士の誇りも女としても踏みにじられた娘は、締まりなく黄色い尿を噴き漏らしていた。同時に数秒前まで牡を咥えていた肉壺も、ヒクヒクと悶えて白濁粘液をしぶく。

「ひぅっ！　うぁぁ、はくぅぅぅんんんぅぅッ！　見ない、でぇぇ――――ッ！」

牡の濃密な匂いと熱にあてられたかのように、小便と潮の二筋の噴水は止まる気配を見せず、蒼き鎧を汚していく。震える腰が溜まったものを吐き出す解放感と溢れた絶頂の余韻でガクガクと震え、霞む視界には腰当てに降りかかる尿の黄色い虹が焼きついていた。

――ぶしゃ……ッ！　びゅっ、びゅぶぅ！

腰が砕け、ずるりと力なく石床に崩れ落ちる。痣の浮く尻は不甲斐なく小刻みに痙攣し、二つの割れ目から止め処なく尿と濁液を撒き散らしていく。尻穴も物欲しげにヒクヒクと蠢き、淫乱牝娼婦の誕生を彩っていた。

「はは、壮観じゃないか。俺の精液が潮吹きと一緒に漏れ出してるぞ！」

「小便のみならず、なんと締まりのない穴どもだッ」

兄弟は顔を見合わせて嘲笑っていた。性欲を満たしたその表情は晴れ晴れとしている。

冷たい室温に、汗が冷えて震えが奔る。硬い石床に迸る尿の水音に、男たちもまた尿意を刺激されていた。
「ふふ、便所は便所らしく、小便をかけてやろう」
――じょろっ……びぢゃびぢゃびぢゃぁぁ……。
「面白い。ならば僕は締まりのない牝穴に……ふはぁぁ……おっ、おぁ、あったかいッ」
――ずにゅぅ！　どぷどぷどぷっ……びゅぶっ、ぶびびぴィ……ッ。
パクパクと口を開けた淫裂に再度潜った肉棒が、黄色く生温かい飛沫を放つ。
（あぁ、熱い、臭ぃぃ……でも、安心する……。男の匂い、エッチな匂いぃ……）
身体の内と外で黄色い飛沫が飛び散る。女の大事な器官を排尿で汚され、騎士の誇りが詰まった鎧を黄色く染め抜かれても、もはやリデアには気力すら残されてはいない。ただ、与えられる快楽に恭順する奴隷。亡国の王子を守り通すと誓った青き聖騎士は、もうどこにもいはしないのだ。
「いよいよ、フィナーレだ」
ぐったりとうな垂れる少年の隣で、傍観する調教師は誰にともなくぽそりと小さく呟くのだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**